様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０６４６

研究課題名（和文）コミュニケーション中心の教材がドイツ語学習者の動機づけに与える影響に関する研究

研究課題名（英文）The influence of communicative language teaching materials on the motivation of Japanese learners of German

研究代表者
藤原　三枝子（Fujiwara, Mieko）

甲南大学・国際言語文化センター・教授

研究者番号：５０３０９４１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本の英語教育が「言語を用いて何ができるか」という行動中心主義に向う中で，コミュニカティブな教材でドイツ語を学ぶ大学生の教材評価や動機づけ，学習環境に対する認知を探った。質問紙調査の結果，教材は肯定的に受け入れられているが,学習の進行とともに文法訳読法を好む傾向を示した。聴き取り調査の結果,高校の英語教育が学習観の形成に深く関わっていた。しかし，動機づけにとって重要である自己決定理論の基本的心理的欲求を充足する学習環境によって，学習観が変化することが確認された。学習環境には各教師のビリーフが大きく影響し，同じ教材でも授業の作業形態や作業時間の推移に多くの差異が生ずることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Japan’s EFL education has been prioritizing what learners can actively produce in English. Amidst this trend, the study investigated how CLT materials influenced the motivation of Japanese learners of German at a university with respect to their evaluation of the materials and their attitudes towards learning environments. A survey using questionnaires showed that despite positive evaluation of the materials, there was a gradual preference towards the grammar translation method. Student interviews indicated that high school English classes have had a lasting impact on their beliefs of language learning. The study also showed that learning environments in which the basic psychological needs of self-determination theory were satisfied could positively change learner beliefs. Teaching beliefs can greatly affect the learning environment. The study illustrated that irrespective of teachers using the same materials, there were various interaction forms and their arrangements in the classes.

研究分野：外国語教育研究

キーワード：ドイツ語　コミュニカティブ・アプローチ　教材　動機づけ　自己決定理論　外国語学習観　教師　ビリーフ

１．研究開始当初の背景

外国語（英語）教育に対する文部科学省の方針は，実践的な運用能力の養成に向かっていると言えるだろう。例えば，2009 年度の「指導要領外国語」改訂の趣旨をみると，中学校・高等学校を通じて４技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図ること，教材の題材や内容については４技能を総合的に育成するための活動に資するものになるように改善を図ること，コミュニケーションを支えるものとして文法指導を言語活動と一体的に行うように改善を図ること，などとしている。また，「学習指導要領に基づき，各中・高等学校が英語力を達成するための学習到達目標を『言語を用いて何ができるか』という観点から『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定する」ための具体的な手引きも公表されている（文部科学省初等中等教育局 2013）。

本研究は，日本の英語教育の方針が徐々に「言語を用いて何ができるか」という行動中心主義に移行する中で，ほとんどの場合初修外国語となるドイツ語を，コミュニカティブな教材で学ぶ大学生の教科書の受容や動機づけ，動機づけに影響を与える学習環境に対する認知を探ることをテーマとしている。また，授業を総合的に考察するために，学習者の動機づけや教材の受容に深く関わると考えられる教師のビリーフと教材との関係性を探ることとした。

２．研究の目的

本研究は，コミュニカティブ・アプローチに基づく教材を使って基礎ドイツ語を学ぶ大学生が，教材をどのように評価するか，教材評価と動機づけ，学習内容に対する希望，学習環境に対する認知および文法学習やリーディングに関する学習観との関係性を調査することを目的としている。また，学習環境の構築に大きく関わる教師のビリーフも調査することで，コミュニカティブ・アプローチの教材を使用する授業を総合的に捉えることを目的とする。

３．研究の方法

学習者調査については，2014 年度のパイロット調査によって修正した質問紙を使用して，2015 年度を本調査の年とした。コミュニカティブ・アプローチに基づく４種類のドイツ語教材（ドイツで出版されたもの：*Menschen A1*, *Schritte international* (*Schritte plus*) *1*,日本で出版されたもの：『スツェーネン１　場面で学ぶドイツ語』：*Szenen 1*(*integriert*), 『スタート!（ベーシック）―コミュニケーション活動で学ぶドイツ語―』：*Start frei!* (*Neu*)）を使用して基礎ドイツ語を学ぶ大学生を対象として，前期 1 回と後期 1 回の質問紙調査を実施した。2 回ともに，原則，同じ学習者を調査対象とした。得られたデータに量的な分析と解釈を行った。加えて，後期授業の終了後に，質問紙調査に参加した学習者に対して聴き取り調査を行い，質的分析と解釈を行った。聴き取り調査についても，2014 年度にトライアル調査を行い，2015 年度に本調査を実施した。こうした量的・質的調査の混合調査方法により，総合的な解釈を目指した。

教師調査については，授業観察と聴き取り調査を実施し，学習者調査と同様に，2014 年度にトライアル調査，2015 年度に本調査を行った。学習者調査は藤原三枝子（研究代表者），教師調査は森田昌美（連携研究者）の研究テーマとした。

４．研究成果

（１）学習者調査によって得られたデータの分析と解釈については，すでに論文およびポスター発表として公表している藤原 (2017a; 2017b; 2018）および Fujiwara (2015a; 2016a) に基づき，以下にまとめる（これらの文献については 5.「主な発表論文等」を参照）。

2015 年度の本調査では，前期調査（１回目）には 20 大学 43 人の教師と彼らの 1535 人の学習者から，後期調査（２回目）には，同大学の 42 人の教師と彼らの 1367 人の学習者から参加の協力を得た。前期の質問紙調査では，教科書のコンセプト評価，学習開始動機，学習希望内容，学習観（文法，リーディング），自己決定理論（self-determination theory）に基づく動機づけ（学習理由，学習環境の認知），学習成果の自己評価について，第二回調査では，上記の第一回調査項目の中の，教科書のコンセプト評価，学習観，動機づけ，学習成果の自己評価について，それぞれ５（そう思う）～１（そう思わない）の５件法で尋ねた。質問紙の中で，文法およびリーディングの質問項目の作成に際しては，Kutka et al.（2010）を参考とし，学習環境の認知に関する項目は，Deci & Ryan の自己決定理論の下位理論である「基本的欲求理論」（Basic Needs Theory）（Ryan & Deci 2002）に基づいて作成した。この理論は，人間には「有能さへの欲求」，「自己決定（自律性）への欲求」，「関係性への欲求」の３つの基本的な心理的欲求が内在すると仮定し，環境がこうした欲求を満たしていると人が感じるかどうかが動機づけに影響するとしている。

以下の表１は，前期・後期および前期・後期の両方の調査に参加した学習者の人数を調査対象教科書ごとに示している。

表１　教科書と調査参加学習者人数

教科書	参加学習者数		
	１回目	２回目	両方
Schritte international (plus) 1	323	270	242
Menschen A1	248	236	195
Szenen 1 (integriert)	316	297	244
Start frei! (Neu)	648	564	510
合計	1535	1367	1191

教科書のコンセプトに関する９項目の評価について，前期調査に参加した 1535 人の学生のデータを分析した結果，コミュニカティブなドイツ語教材は総じて肯定的に受け入れられていた。しかし，とくに，「ドイツ語を使う活動が中心であること」，作業形態として「ペアワークやグループワークで取り組む課題が多くあること」に対する評価は高いものの「発見的な文法学習」，「推量的な語彙学習」や全訳ではなく「ポイントを読み取るリーディング」など学習方略に関する項目への評価は相対的に低かった。ただし平均値の標準偏差の値がどれも高く，学習者間で評価のばらつきが大きいことが示された。また，従来の調査と同様に「文法は先生に分かりやすく教えてもらいたい」という学習観がとりわけ高い平均値を示した。

重回帰分析によって，コミュニカティブな教科書のコンセプト評価に影響を与えている要因を分析した結果，希望する学習内容については「対人コミュニケーションに関するスキルを学びたい」，学習観については「文法学習を重要とみなしているか」および「リーディングに際してオーセンティックなテキストを良いとみなしているか」という要因，学習環境については「自律性への欲求」，「有能さへの欲求」，「関係性への欲求」の３基本的心理的欲求すべての認知に影響を受けていることが分かった（Fujiwara 2015a）。

調査への参加者が一番多かった *Start frei!* (*Neu*)を教材としてドイツ語を学習している学生 648 人の回答を分析した結果でも，「ドイツ語を使う活動が中心であること」，「ペアワークやグループワークで取り組む課題が多くあること」，「実践的な書く課題」に対する評価は高く，その一方で「発見的な文法学習」，「推量的な語彙学習」や「ポイントを読み取るリーディングの学習」，「ポイントを聴き取るヒアリングの学習」など，学習方略に関する項目は相対的に評価が低かった。全体の分析結果と同様に平均値の標準偏差の値がどれも大きいことから，学習者間での評価にばらつきが大きいことが示された。

専攻分野と教科書のコンセプト評価の関係では，外国語学系が社会学系，人文学系，自然科学系のどの学系よりも有意に高いが，それ以外の学系間では有意差は認められなかった。性別による差も有意ではなかった。教科書評価に影響を与えている要因としては，調査全体の結果と同様に「対人コミュニケーションに関するスキルを学びたい」という学習内容への希望，「文法学習を重要とみなしているか」，「オーセンティックなテキストを良いとみなしているか」という学習観に関する要因，「自律性」，「有能さ」，「関係性」の学習環境についての３基本的心理的欲求すべての認知が関わっていることが分かった（Fujiwara 2016a）。（質問紙は次の URL を参照：http://www.konan-u.ac.jp/kilc/modules/info/src/fujiwara/4.pdf）

前期と後期の両方の調査に参加した学習者 1191 人のデータの２回の調査を比較の観点から分析した結果，教科書のコンセプト評価については，前期調査で 4.0 以上の高い値を示し，教科書の中心概念と言える「言語活動中心」とそれに伴うインタラクティブな作業形態（ペアワークやグループワーク）に対する評価が後期で有意に下がっていた。しかし，前期も後期も平均値の標準偏差はかなり大きく評価にばらつきがある。

表 2 教材のコンセプト評価：前期・後期

	前期		後期	
	M	*SD*	*M*	*SD*
1. 各課の導入としてのタイトル頁	3.82	.983	3.93	.969
2. 発見・推量型の文法学習	3.48	1.056	3.49	1.054
3. コンテキストを通じての語彙学習	3.79	1.049	3.77	1.044
4. ポイントを読み取るリーディング	3.77	.933	3.75	.937
5. 実践的な書く	3.94	.900	3.84	.919
6. ポイントを聴き取るヒヤリング	3.80	.929	3.71	.951
7. ペアやグループワークでの活動	4.05	.948	3.93	.964
8. ドイツ語を使う活動が中心	4.06	.882	3.95	.900
9 .日常生活に即したテーマ	3.93	.935	3.87	.968

学習観に関する分析では，「文法」については，前期調査(*M*:4.13; *SD*:.08)で高い平均値を示した「文法の重要性」は後期(*M*:4.23; *SD*:.73)で有意に高くなり，「文法の明示的な説明」に対する必要観は，前期(*M*:4.16; *SD*:.76)も後期(*M*:4.14; *SD*:.72)もかなり高い。加えて，文法は「特化して学ぶ方がよい」という学習観が前期（*M*:2.97; *SD*:1.12）に比べて後期（*M*:3.12; *SD*:1.10）に有意に高くなった。学習者の「テキストのリーディング」については，前期（*M*:3.32; *SD*:.96）に比べて後期（*M*:3.44; *SD*:.92）に日本語訳の役割を大事だと考える傾向が有意に高くなった。

教科書の評価と学習環境との関係を探る目的で，２回の調査の「学習環境に対する認知の差と教科書評価の差」を分析した。

表 3 教材評価と基本的心理的欲求の認知：前・後期の差の相関

		教材評価の差	自律性認知の差	有能感認知の差	関係性認知の差
教材評価の差	相関係数	1			
	有意確率				
	n	1164			
自律性認知の差	相関係数	.408***	1		
	有意確率	0			
	n	1155	1177		
有能感認知の差	相関係数	.360***	.676***	1	
	有意確率	0	0		
	n	1149	1167	1172	
関係性認知の差	相関係数	.356***	.501***	.449***	1
	有意確率	0	0	0	
	n	1152	1169	1166	1175

*** p<.001

教科書評価の前・後期の差は，３心理的欲求の充足感の差と正の相関を示した。加えて，３心理的欲求の認知には前・後期の差にかなりの正の相関が認められた。また，学習環境

を，自律性と有能感を促進する環境と感じる傾向が後期に有意に高まった（藤原 2017a）。

2015 年度末に実施した 21 人の学生の聴き取り調査の分析結果としては，学習者たちは，高校での英語教育で文法が中心的役割を果たしていたと感じていること，また，留学経験により，言語知識が実践で役に立たないことを体験したことでアクティブな実践型授業が重要と考える学習者や，最初に教師による文法説明を好む学生が多いものの，文法は言語活動の中で身につけるものと考える学生，文法の発見的学習という教科書のコンセプトにはじめは戸惑いを感じるものの，徐々にそれを受け入れて楽しむ学生の様子も知ることができた。学生が語る教師の対応として注目すべきこととして，学生たちが自分でノートを作成する必要がないほどに，丁寧な文法説明のプリントを準備するケースである。学生たちはそのプリントを学習にとってとても大事と感じている。文法の教授に対する教師のビリーフとして興味深い。

学習者たちのコメントから，高校までの英語の授業では，頻繁に単語と構文を中心とした和訳をすることでテキストを理解する訓練がなされてきたこと，その結果，ドイツ語のテキストについても全部読まなかったら分からないという不安感や，完訳する必要がないと言われても訳してしまう態度を形成している場合が多いことが分かった。その結果，授業で大意を掴んだり，知りたい情報のみに焦点をあてる読み方をする場合でも，テストを意識し不安を感じる学生が少なくない。全部を和訳する学習経験により「分からない単語」にフォーカスする読み方が習慣となっている可能性がある。その一方で，英語教育ですでにコンテキストから意味を取る読み方に慣れている学生の場合は，和訳に頼らない読み方を好んでいた（藤原 2018）。

一人の学習者の聴き取り調査を SCAT (Steps for Coding and Theorization)によって分析した結果として，高校までの英語教育によって，「文法学習とコミュニケーション」を分けて考える態度，「外国語学習とは文法学習であること」「文法は日本語で学ぶ」という学習観・態度を形成し，「際限のない暗記」により作業と化した英語学習によって，英語が嫌いになった学習者が，最初は日本語のないドイツ語教材に戸惑いを覚えるが，教師の「授業環境作り」により，授業に積極的に参加しコミュニカティブ・アプローチの教材を肯定的に評価するようになり，「文法はコミュニケーションに必要なものを学ぶ」という学習観へ変化した例を報告した（藤原 2017b）。

学習者に対する質問紙調査と聴き取り調査の分析結果としてまとめると，コミュニカティブ・アプローチの教材は学習者に肯定的に受け入れられてはいるが，自律的学習者養成の観点から望ましいと思われる発見型の文法学習やリーディング・ヒヤリングの方略に関するコンセプトについては，まだ十分な評価に至っていない。学習が進むに連れて，いわゆる文法・訳読法を好む傾向が強まる背景として，高校での英語教育の影響が考えられることが聴き取り調査から明らかになった。その一方で，教師の工夫によって，学生の外国語学習観が変化することも確認することができた。学習環境の認知はコミュニカティブな教材のコンセプトをどのように評価するかと深い関係があることも示された。こうしたことから，「使いながらドイツ語の文法も４技能も身につける」ことをめざす授業実践を模索していく教師個人の努力と，教師間の協働での取り組みが必要である。

今後，英語教育がコミュニカティブな方向に変わっていくことにより，学習者のドイツ語教育に対する期待や態度も変化することが考えられる。本調査はその過渡期にあるものとして捉えることができるかもしれない。今後は,学習者が高校までの英語教育によって形成した外国語（英語）に対する学習観の変化を中心として研究を進めて行く。

（２）教師に関する授業観察および聴き取り調査については，以下のようにまとめることができる。研究対象は, 研究代表者が挙げている 4 冊のコミュニカティブな教科書を使う教師たちである。2014 年度は予備調査として 4 冊それぞれ 1 名ずつ，合計 4 名を，本調査の 2015 年度は 2 名ずつ, 合計 8 名を訪ね, 授業参観とインタヴューを行った。

まず予備調査では，長嶺（2014）の挙げる教師の「信念体系」を形造る四つの知識，すなわち「1. 非個人的かつ理論的な知識, 2. 非個人的かつ実践的な知識, 3. 個人的かつ理論的な知識，4. 個人的かつ実践的な知識」のうち，4 番目の実践知に焦点を当てた。これは「暗示的で手続き的な知識」で，個人の実践経験から得られた知識であるため，教師自身が「言語化」することは難しいとされている（金井，楠見 2013）。研究調査では，授業参観とインタヴューを組み合わせることによってその言語化を試みた。

分析の出発点として，「一斉授業，単独授業，ペアワーク，グループワーク」という作業形態の転換とそれらの所要時間を測定した。4 名の授業についてデータを比較すると，転換の回数は 9 回，7 回，6 回，6 回であり，「一斉授業」が授業全体に占める割合は 62%, 69%，67%，67%となった。これらの合計時間に大差はなく，4 名は随時ペアワークやグループワークを取り入れて授業を行っていた。

また聴き取り調査では，次頁の４つのインターアクションのなかで（Funk et al. 2014），「教師と学習者との関係 A」が他の関係 B, C，D に影響を及ぼすことが浮き彫りになった。ただし，授業では「包括的・社会的な次元」,「教育一般の次元」,「専門的な次元」,「授業の次元」（Neuner 1993）における様々なファクターが作用し合い，教師のビリーフが

授業実践へとつながるとは限らない実情を確認した（森田 2017b）。

表 4 授業における中心的な関係

関係 A	教師と学習者との関係
関係 B	教師と作業形態・教材・メディア・課題等との関係
関係 C	学習者と作業形態・教材・メディア・課題等との関係
関係 D	学習者間の関係

次に本調査も基本的には予備調査と同じ調査方法を用いた。前者との違いは 1. 研究対象者数が 8 名，2 倍に増えたこと，2. 作業形態の転換とその所要時間を合計して比較するのではなく，その経過をたどったこと，3. 語彙学習についての教師のビリーフを教科書ごとに，2 名ずつ比較したことである。結果として，同一の教科書を使用しても，教師の言語学習歴・教授歴・研修歴によって授業方法・授業内容に大きな差異が生ずることが明らかになった（森田 2017a）。

終わりに，上記二つの研究調査の基礎となった研究調査に言及する。2014 年 9 月から 12 月まで，ゲーテ・インスティテュートの教員養成・研修用のオンライン・コースに試験的に参加し，それを契機に 2014 年度後期に作業形態について選択式と自由記述形式の質問紙調査を行った。テーマは通常行っているグループワークから，頻度数の低いペアワークに転換することで，学習者と教師，ならびに学習者間のインターアクションにどういった変化が起こるか，また学習者は二つの作業形態をどう捉えているかである。

Schwerdtfeger（2007）によれば，作業形態とはテクニックではなく，特にグループワークとペア・ワークは学習者の社会的学習と言語学習に関わってくるという。初級クラス 2 つ，専門クラス 2 つでペアワークとグループワークについての調査を行った結果，4 クラスで，二つの作業形態の組合せを望む声が 62%，54%，57%，52%と，半分以上を占めた。

どちらか一方の作業形態を希望する声では，「人間関係重視型」のクラスでは，自由記述で情意的要因を挙げているペアワークを，「課題解決重視型」のクラスでは，認知的要因を挙げているグループワークを好む傾向が見られた。また専門クラスでは，「現状維持型」，「上昇志向型」というクラス間の差異はあっても，質問紙調査では似通ったデータが出た。そこで最終的な成績分布を比較したところ，平均的な成績に集中するクラスでも，成績にばらつきがあるクラスでも，平均点は 79 点で，クラス内の差異も全体的な達成度と言う点では大きな問題にはならなかった（森田 2018）。

＜引用文献＞

①金井壽宏，楠見孝，2012，実践知―エキスパートの知性，有斐閣
②長嶺寿宣，2014，言語教師認知研究の最近の動向，言語教師認知の動向，開拓社
③文部科学省，2009，高等学校学習指導要領解説　外国語編　英語編
④文部科学省初等中等教育局，2013，各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き
⑤Funk, H. et al., 2014, *Aufgaben, Übungen, Interaktion* (*Deutsch Lehren Lernen 4*), München: Klett-Langenscheidt
⑥ Kutka, S. et al., 2010, Was denken die japanischen Deutschlerner über Grammatik und Grammatiklernen? Eine Untersuchung an der Waseda-Universität in Tokyo. In: Hoshii, M.; Kimura, G.; Ohta, T. & Raindl, M. (Hrsg.) 2010, *Grammatik lehren und lernen im Deutschunterricht in Japan – empirische Zugänge*, München: iudicium, 69-87
⑦Neuner, G. & Hunfeld, H., 1993, *Methoden des fremdsprachlichen Deutschunterrichts. Eine Einführung. Fernstudieneinheit 4,* Berlin: Langenscheidt
⑧Ryan, R. M. & Deci, E. L., 2002, Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In: Deci, E. L. & Ryan, R. M. (Eds.), 2002, *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press, 3-33
⑨Schwerdtfeger, I. C., 2007, Sozialformen: 44 Überblick, 46. Gruppenarbeit und Partner-arbeit, in: Bausch, K.-R., Christ, H., Krumm, H.-J. (Hrsg.), *Handbuch Fremdsprachen-unterricht*, 5. Aufl., Tübingen

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　9 件）

①藤原　三枝子，2018，初級ドイツ語学習者の文法・リーディングに関する学習観とリーディングの方略を養成するための練習問題のシークエンス案，言語と文化，査読無，22，109-124

②藤原　三枝子，2017a，コミュニカティブな教科書でドイツ語を学ぶ学習者－学習観と学習環境に対する認知を中心に－，日本独文学会研究叢書，査読無，125，53-67

③藤原　三枝子，2017b，コミュニケーション中心の教材を使う学習者の外国語学習観－質的分析手法 SCAT を用いた聴き取り調査の分析例から－，言語と文化，査読無，21，43-58

④ Fujiwara, Mieko, 2016a, Studentische Evaluation der kommunikativen Konzeption eines japanischen DaF-Lehrwerks und mögliche Einflussgrößen, *Informationen Deutsch als Fremdsprache*, 査読有, 43(5), 516- 536

⑤ Fujiwara, Mieko, 2016b, Entwicklung japanischer DaF-Lehrwerke mit kommunikativer Orientierung von 1990 bis zur Gegenwart －Analyse von drei Lehrwerken, *Sprache und Kultur*, 査読無, 20, 21-38

⑥藤原　三枝子，2015，実践的授業研究：コミュニカティブな言語能力養成を目的とする授業において作業形態の変更が学習者に与える情意的・認知的影響－ペアワークからグループワークへ－，言語と文化，査読無，19，61-76

⑦森田　昌美，2018，コミュニカティブなドイツ語授業における作業形態 －グループワークとペアワークに関する一考察－，共通教育研究紀要，査読無，3，14-28

⑧森田　昌美，2017a，教師のビリーフ（信念）と授業実践－コミュニカティブな教科書を使用するドイツ語教師の視点から－，日本独文学会研究叢書，査読無，125，68-86

⑨森田　昌美，2017b，教師のビリーフと授業実践-コミュニカティブな教科書を使用したドイツ語授業を中心に，共通教育研究紀要，査読無，2，15-29

〔学会発表〕（計　14 件）

①藤原　三枝子，2017a，学習者はどのようなときに外国語を意欲的に学ぶのか，第二言語習得研究会（JASLA）

② Fujiwara, Mieko，2017b，Wie schätzen japanische Studierende kommunikativ orientierte DaF-Lehrwerke ein? Ergebnisse quantitativer und qualitativer Untersuchungen, 14.Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer

③藤原　三枝子，2017c，コミュニカティブなドイツ語の教科書を使用する大学生の学習観，言語教育エキスポ 2017

④ Fujiwara, Mieko, 2016a, Start frei!: Konzeption, Bewertung der studentischen Leistungen, studentische Evaluation des Lehrwerks, DAAD(Deutscher Akademischer Austauschdienst)

⑤藤原　三枝子，2016b，コミュニカティブな教科書に対する学習者の認知－学生の外国語学習観，学習環境に対する認知から探る－，日本独文学会秋季研究発表会

⑥藤原　三枝子，2016c，コミュニケーション中心のドイツ語教材と，学習者の評価，言語教育エキスポ 2016

⑦藤原　三枝子，森田　昌美，境　一三，太田　達也，2016，学習者中心のドイツ語教育のために，東北大学高度教養教育・学習支援機構

⑧ Fujiwara, Mieko，2015a, Motivation japanischer Deutschlernender im universitären Bereich in Bezug auf kommunikativ orientierte Lehrwerke, Deutsche Gesellschaft für Fremdsprachenforschung

⑨藤原　三枝子，2015b，ドイツ語学習者の動機づけを向上させるための授業環境（日本で出版されているドイツ語教科書の分析から），言語教育エキスポ 2015

⑩藤原　三枝子，2014，大学における基礎ドイツ語学習者の動機づけと教材との関係性，京都ドイツ語学研究会

⑪藤原　三枝子，森田　昌美，2015，コミュニカティブなドイツ語授業において，「ペアワーク」や「グループワーク」は学習者にどのように受け入れられるのか，言語教育エキスポ 2015

⑫森田　昌美，2016a，教師のビリーフ（信念）と授業実践－コミュニカティブな教科書を使用するドイツ語教師の視点から－日本独文学会秋季研究発表会

⑬森田昌美，2016b，教師のビリーフと授業実践-コミュニカティブな教科書を使用したドイツ語授業を中心に，言語教育エキスポ 2016

⑭森田　昌美，2015，「グループワーク」から「ペアワーク」への転換は学習者ならびに教授者にどのような影響を与えるか，JALT Pan-Sig Conference

〔図書〕（計　2 件）

①Fujiwara, Mieko; Motokawa, Yuko; Nomura, Yukihiro; Carsten Waychert, 2018, *Start frei! 2* (Kursbuch)，三修社，123

②Fujiwara, Mieko; Motokawa, Yuko; Nomura, Yukihiro; Carsten Waychert, 2018, *Start frei! 2* (Arbeitsbuch)，三修社，45

６．研究組織

(1)研究代表者

藤原　三枝子（FUJIWARA, Mieko）
甲南大学・国際言語文化センター・教授
研究者番号：50309415

(2)連携研究者

森田　昌美（MORITA, Masami）
神戸学院大学・共通教育センター・准教授
研究者番号： 60739217